

【「河内もの」の誕生】



東光は八尾との運命的な出会いに感銘を受け、創作意欲を大いに刺激されることになりました。愛する八尾が変わりゆくのを目の当たりにし、そのおもいはますます強くなりました。

その中で、いわゆる「河内もの」と呼ばれる作品群が生み出されました。その背景には、人生の紆余曲折を経て、辿りついた八尾を安住の地とし、八尾の気質・風土を愛し、後世に書き残したいという、東光の作家としての本能と、郷土への強いおもいがありました。

東光はこの地で、たくさんの人々と交流しました。そして色々なことを吸収し、その文学の世界も広がっていきました。それらの作品群はいわば、交流した人々や八尾の地と、東光との合作ともいえましょう。東光と八尾・八尾の人々とは、その位密接な間柄でした。

昭和32(1957)年に東光は「お吟さま」で直木賞を受賞し、その生

↑闘鶏の軍鶏と (昭和32年:岩宮武二撮影) 活は多忙を極めますが、その一方で、愛着ある八尾の地にしっかり根をおろし、八尾の人々と生活する東光の姿が確かにありました。

— 企 画 展 示 の み ど こ ろ —

【八尾の地に根をおろして】

今回の企画展示では、写真家(岩宮武二・井上博道)の方々から提供された東光の肖像写真計20点あまりと、東光と交流のあった方々から提供された東光の日常写真・東光本人の愛用品等の資料をご紹介します。

写真家:岩宮武二撮影の肖像写真は、昭和32(1957)年当時の東光の【快活であり、明朗な】外面と、【思慮深く、執筆にあたり苦悩する、繊細な】内面を捉えていて、東光のふかい人間性を窺い知ることができます。その頃の東光は、日中は宗教新聞「中外日報」の社長をつとめ、メディア取材、絶え間ない東光を慕う来客への対応、住持としての檀家まわりなど、極めて多忙に種々の仕事をこなし、周囲が寝静まった頃から朝方まで執筆活動を行う生活でした。そのためその風貌と相まって、東光には「みみずく」というあだ名がついていました。

その東光のありのままの姿を捉えんとする、岩宮の苦勞もしのべれます。執筆中の姿を撮影した、当時駆け出しであった岩宮は、夜中から朝まで東光につきっきりでした。雑誌に掲載された岩宮の写真について、東光は「あの写真は良かった。もの書きの業(ごう)が写っていた」と評価し、それを人づてに聞いた岩宮は大いに勇気付けられ、感謝したそうです。その様子は、東光が逝去した際、岩宮が新聞に寄稿した追悼文に掲載されています。

東光と交流のあった方々から提供された写真からは、当時の東光の生活を窺い知ることが出来ます。東光はひっきりなしに訪れる来客をいつも優先し、自分の仕事は後回しにし、常に笑顔だったそうです。そうした人々と写っている東光には、朗らかな、優しい、心を許した人にプライベートで見せる表情がみて取れます。写真ではご紹介できませんが、東光と茶会を開いた、一緒に旅行に行った、家によく泊まりに来た、といった親しみを感じられる数々のエピソードは枚挙にいとまがありません。また、東光本人の愛用品からは、普段の和装のイメージとは違った、ダンディーでかなりのこだわりがある、洋装も好きな姿が窺い知れます。

【東光が考えていたこと とは】

この当時の東光の脳裏には、どのようなことが浮かんでいたのでしょうか。想像するしかありませんが、ヒントが残されています。当時執筆していた「テント劇場」の跋文(あとがき)には、「僕の目の前の河内平野には、殆ど毎日、新しい建築物が建って行く。今に河内平野は家で埋り、野原も田圃もなくなって仕舞うだろうと思う。僕は彼等のためにも記録しておこうと思う。」とあります。

全国区の有名人となりつつも、郷土の人々と交わり、郷土を愛し、その変貌を案じ、作品にその記憶を留めようとした「八尾住人:今東光」の姿が、確かにそこにあったのです。そして、昭和32(1957)年、八尾市政10周年を記念して制定された第1回八尾市文化賞は、「著作や講演による郷土文化の紹介に貢献したこと」により東光が受賞したのです。

(※次回企画展示は、平成27年秋に開催予定です)